

序

市野川 容孝

2015年度の地域社会論（社会調査実習）は計7つの班からなり、そのうちの3つの班（A、F、G）の報告書が第1分冊、2つの班（B、C）の報告書が第2分冊、同じく2つの班（D、E）の報告書が第3分冊となった。全体の構成は、以下のとおり。

第1分冊 現代社会の諸領域における地域性の『発見』——教育・政治・文化

第1部 コミュニティ・スクール制度を中心とする学校の地域連携の展開——武蔵村山市の中学校を事例として（A班）

第2部 地域に根ざした社会運動の特性と展開——国政的問題への関心に注目して（F班）

第3部 映画館文化に作用する「地域」の特性——映画興行者と観客の両視点から（G班）

第2分冊 外国人と地域社会——東京都区部における外国人の受容とコミュニティ形成の実態

第1部 高田馬場の「ミャンマー・コミュニティ」をめぐる一考察（B班）

第2部 地域社会への外国人受け入れをめぐる現状と課題（C班）

第3分冊 LGBTコミュニティに関する考察——LGBT非営利団体と大学LGBTサークルを事例として

第1部 日本におけるLGBT団体（D班）

第2部 都内の大学におけるLGBTサークルの意義と考察（E班）

以下に掲載する3つの論文は、上記の3分冊の報告書をもとに、あらたに書き下ろされたものである。

上記A班の調査にもとづく武内建人「コミュニティ・スクールの導入と実践——武蔵村山市の中学校を事例として」は、コミュニティ・スクール、すなわち保護者や地域住民が学校の運営や教育活動に参加する学校運営協議会制度の現状と課題を、同制度の導入を2010年から始めている武蔵村山市を例に、関係者へのインタビュー調査によって考察して

いる。

上記F班の調査にもとづく安東慶太「地域社会に根ざした3.11以後の社会運動」は、2015年9月の安保関連法制定に対し（国会前だけではなく）自分たちが暮らす地元で反対運動を繰り広げた人びとへのインタビューを通じて、国政的な問題がどのようにして地域へと結びつけられてゆくかを考察している。

上記B班の調査にもとづく申恵媛「多層化する結節点としての「高田馬場」——「ミャンマー・コミュニティ」調査から」は、高田馬場という地域と空間がミャンマーの人びとにとって（居住地というよりも）さまざまな交流や支援の結節点として機能することで、ミャンマーの人びとのコミュニティを生み出してゆく様を、インタビュー調査を通じて明らかにしている。

最後に、上記の各調査にご協力いただいた方々すべてに、この場を借りて、あらためて深く御礼申し上げる次第である。